

委員からの御意見と回答

御意見	回答
令和5年水稻の作柄について	
新潟県は、高温で白未熟粒が出て収量減少となっていたという話があったが、高温で収量基準に満たない玄米が増えたということか。また、渇水の影響もあったと考えて良いのか。	新潟県については、気温だけではなく、フェーンや少雨、御指摘のあった渇水といった状況も重なったため、白未熟粒が多く発生し、収量基準に満たない玄米の発生につながったと見ている。
東北の作況指数は101であるが、秋田県の作況指数が97となっている。水害等の影響が大きく回復することがなかったという認識でよいか。	秋田県においては、6月から7月中旬にかけての日照が他県を下回っており、分けつがより抑制され、全もみ数が他県に比べて少なかったことに加え、御指摘の7月中旬の豪雨の影響もあり、作況が100を下回る結果となったところ。
8月結果をみると、大雨などの影響を受けた長崎県、佐賀県などの作柄は悪かったが、最終の作況指数だと102、103と好転している。これは天候が良くなり回復したという理解でよいか。	長崎県及び佐賀県においては、もみ数は平年を下回っていたが、その後の天候に恵まれ、登熟は良好であったことから、最終的な作況指数は100を上回る結果となった。
宮崎県については、九州管内でみると少し作況が良くないがなぜか。	九州における普通栽培について、宮崎県では、7月下旬から8月上旬にかけての日照が他県に比べて不足しており、1穂当たりもみ数が少なくなったことによるもの。
作況指数に与える影響として、高温と9月中旬以降の台風の影響が少なかったことで全国的に良い作況指数となったと考えて良いのか。	高温・多照が登熟によい影響を与えた地域もあるものの、新潟県など、高温等により白未熟粒が多く、収量基準に満たない玄米の発生につながった地域もあり、地域によって極端な高温となった時期や期間等の違いにより、作況の良否いずれの影響もあったと考えている。また、台風の影響が少なかったことは、御認識のとおり。
病虫害の発生による作柄への影響の「斑点米カメムシ類」については、高温で発生しやすいのか。また、多湿でも発生しやすいのか。	斑点米カメムシ類は、高温多湿の環境を好み、気温が高くなるほど繁殖と成長が盛んになると考えている。
今後ますます高温傾向になることも想定されるので、高温不稔の状況についての分析が必要になってくるのではないのか。	高温不稔の状況については、引き続き関係機関からの情報収集等の結果も踏まえて注視の上、作柄の予測や要因整理を行ってまいりたい。
作付品種が増えることによる調査労力への影響や品種選定基準などはあるのか。	作況調査では、無作為に選定した調査筆により全体の収量を把握する調査設計としており、品種を考慮した選定は行っていないことから、作付品種の増加に伴う調査労力への影響はない。なお、調査筆を無作為に抽出した後、耕作者に品種を確認し把握しているが、結果として概ね県内の品種の構成割合を反映しているものと考えている。

委員からの御意見と回答

御意見	回答
令和6年産水稻の10a当たり平年収量(案)について	
平年収量の算定方法を変えたのか。今年は変動する県がすごく多い印象。	資料2のとおり、算定方法は変えていない。平年収量変動した県の数については、令和5年産は2道県、令和3年産は13道県、令和2年産は17道県であり、変動した県の数は年によってまちまちである。
平年収量の変動の定義はどうしているのか。	前年産の平年収量と比較し増減している都道府県を対象としている。資料No.3に記載している前年対差のとおり。
和歌山県の平年収量が6kg増加となっているのが、グラフ(図1)からのイメージと乖離があるように思う。	和歌山県では、生産事情として「きぬむすめ」、「にじのきらめき」など収量水準の高い品種への転換が進み、前回平年収量変動した令和元年より品種構成が変わってきている。令和6年産も「きぬむすめ」、「にじのきらめき」が増加傾向であり、6kgの増加は適当と考えている。
北海道の平成30年の収量の落ち込みに関してはどうか。また障害型冷害は無かった認識でいいのか。	北海道の平成30年の収量の落ち込みは、6月中旬から7月中旬にかけての低温や日照不足で分けつが抑制され穂数が確保できず、全もみ数が少なかったためと考えている。なお、7月下旬からの減数分裂期以降はおおむね高温で推移しており、障害型冷害ではなかったと考えている。
静岡県と愛知県は、ここ5、6年登熟が悪いが、高温が関係しているのか。	静岡県及び愛知県で近年の登熟が平年を下回った年の要因を見ると、明らかに高温の影響があったのは令和元年産及び令和2年産の静岡県であり、静岡県の他の年産及び愛知県の各年産は、主に日照不足等によるものと考えている。
東北の高温耐性品種で高品質だけでなく、全国的に収量も上がる傾向にあるが「にじのきらめき」や「にこまる」、山形県だと「雪若丸」とか(高温に)強い品種があると思うが、それらの品種は収量水準が高い傾向にあるのか。	これらの品種については、高温耐性や高品質だけでなく収量水準も高い傾向にある。
各公設試が昨年度の高温を経て高温耐性品種導入など対策を進めた結果、本年度の記録的猛暑でも被害をある程度抑えることができた印象だが、実態はどうか。	各地域において、地域の特性を踏まえ、品種改良や地域に適した他県の品種を導入するなどの取組が進んでいるとみられる。
平年収量に対し実収量が上回っているのは東北地域と北海道。実収量が上回っている場合は品種の更新がうまく多収品種に入れ替わっている地域では高かったとの理解でよいか。	収量水準の高い品種が増加傾向にあることも要因の一つと考えられるが、北海道・東北では近年冷害リスクが低減してきていることも要因と考えられる。
平年収量が各県においてバラつきがある(500kgや600kg)。これは品種によるものか。	御認識のとおり、各県における平年収量の差は、品種によるところが大きいと考えている。また、作られている地域ごとの気象条件に合わせた代表的な生育ステージや栽培技術の違いも影響していると考えられる。

委員からの御意見と回答

御意見	回答
資料No.4の表3によると、10年前よりも1㎡当たり株数が少なくなっているが、疎植傾向が進んでいるということか。また、収量水準との関係はどうか。	今回、増減のあった地域の収量構成要素（表3）の1㎡当たり株数を見ると、多くの地域で10年前に比べ少なくなっている。一方、各地域とも、有効穂数や全もみ数の確保ができないような過剰な疎植は避けるよう指導されているため、全もみ数は確保されている地域が多く、必ずしも減収要因とはなっていないと考えられる。